

てしまう。家の中から死んだ夫の気配を消し去る妻。娘は父の死に疑問を持つが、母と意思の疎通を図ろうとする。母は娘からの歩み寄りを拒絶し、最後に娘に自分の行為を暗示する。

猛虎の存在

「嫉妬」や「自分が周囲から認められない事」は人間の負の行動の普遍的な動機である。

本作品は、妻が夫を殺害するまでの葛藤を描くことで、人間が自らの内側に潜んでいる「邪悪」に心を占拠される過程をあぶり出している。夫に顧みられない妻は、他の男性が自分に魅惑されているという事実を必要としている。自分を欲している人間の存在が、彼女の自尊心を維持する支えとなっている。あくまでも自分を受け入れず娘ばかりを見る夫。発作が起きた時でさえも、妻の名でなく娘の名を呼んだ夫。完全に自尊心を傷つけられた妻は凶行に及んでしまう。ともに相手の気持を思いやることができない、或いはそんな余裕のない妻、夫、娘。心の交流がない夫婦は常に自分の気持を第一に考え、相手の行動や言動を理解しようとせず、自分の気持を外に向けて発信することもせず、内側へ向かっていく。長年に渡って妻の心に巣食っていた、夫に相手にされない鬱屈が、最後に妻の心を完全に「邪悪なもの＝猛虎」に占拠させてしまう。

1 月 例会 (第 187 回) (2005/1/22)

1) 東西「秘密地帯」(『大家』2003 年第 1 期)

中村みどり

沈從文は故郷湘西の少数民族を取りあげ、恋愛を至上とする情熱的で高貴な民族の物語を語ったが、「秘密地帯」では今日的な視点から少数民族を登場させている。1966 年生まれの作者は壮族自治区・広西出身であり、広西文化院所属の専門作家のほか新聞編集など幅広い経歴を持つ。

物語の冒頭で、都市の青年成光は夢想家のため現実的な恋人にふられ、失意のあまり歌声を響かせながら山中の川に身を投げる。彼を救ったのは村娘蓮花だった。金銭を必要としない平和な村に住み着いた成光は歌が上手く、蓮花は彼に惹かれ、村人は異なる世界に属する二人を引き離そうとする。絶望して再び身投げした成光のもとに蓮花は村の掟を破って身を寄せるが、後に失踪してしまう。成光はビルが立ち並ぶ都市「南寧」の住まいへ戻ったのち、都市生活に失望して再び山へ入る。だが、村は消え失せ「夜郎国」の碑が残っているばかりであった。嘆く成光の前に夜郎国公主の蓮花が現れ、愛を誓い合った二人

が抱擁すると奇跡的に村は再び姿を現し、「以後この場所は成光の秘密、そして私の秘密となった」と物語は結ばれている。

夜郎国（戦国・秦・漢時代に現貴州西北部・雲南東北部・四川南部・広西北部にあった少数民族の国）という地名、歌垣を連想させる歌を媒介とする恋の成就、シャーマンの舞踏を意味する「師公舞」、魂寄せの儀式などは、山中の村が少数民族（壮族がモデルと想定される）の集落であることを表している。だが、実在の少数民族を描くことよりも作者の筆は、物質的な欲望が渦巻く都市文化からの逸脱者を受けとめる理想郷と純朴な魂を持つ娘という「少数民族」らしさを描くことに向けられている。なお、沈從文の作品ではおもに少数民族同士の恋愛が民族の歴史や悲劇を絡めて語られ、沈從文自身が拘る独自の湘西の世界が描かれていた。

伝統的に理想郷を語る物語では、仙境へ迷い込んだ男性主人公が再び日常へ戻るパターンが多いが、この作品の主人公は日常生活を捨て、山中の村・仙境へ再び入っていく。このような物語の運びは、現代中国社会、都市に生活する人々の疲れを癒すであろう、今どきの青年と少数民族の娘という新鮮な組み合わせの純愛を上手く語り、この作品の大衆的な面白みとなっている。だが、蓮花が下着を着けないエロティックな身体を晒す場面など少数民族の女性に向けられる性的に偏った視線は、読者の庸俗な興味に迎合しすぎているように思われる。また、語り手と成光が所有する蓮花の待つ理想郷の「秘密」という構成は読者にファンタジーを感じさせるが、それと同時に男性の一方的な視線によって物語が構成されていることに気づかせる。

この作者は好んで現代社会のダメな男を描いているという指摘を例会で頂いたが、作者は確かに故意に「広西」ならではの物語を現代的にアレンジしていると言える。しかし、その軽妙な筆遣いは作者の器用さを現すと同時に、「広西」と「少数民族」はこのように娯楽の対象として安易に描かれてしまってよいのだろうかという疑問を読後に残す。

2) 森岡優紀「蘇童の中編小説『井中男孩』について」

（「会報」第18号合評より）

和田知久

本論文は「蘇童は小説という家をどのようにして建てていくのだろうか」という問題意識をもとに、蘇童の中編小説「井中男孩」を題材に「作家の創作方法に迫ろう」としたものである。

この小説をめぐるのは三つの「井中男孩」が存在する。蘇童による小説の「井中男孩」と、この小説の主人公の青年がある日書店で見つけたドイツ人作家ステファン・アンドレ